

生涯学習ふじさわプラン2026

令和5年度事業

社会教育委員会議評価結果報告書

目 次

1	前文	P2
2	基本目標 1 「学びたい思い」を支援する	P3～4
3	基本目標 2 「学べる機会」を提供する	P5
4	基本目標 3 「学びあい」を創出する	P6
5	基本目標 4 「学んだ成果」を生かしつなげる	P7
6	事業全体に対する評価	P8

1 前文

「生涯学習ふじさわプラン2026」の令和5年度の進捗管理について、ここに評価結果報告書を取りまとめた。

本報告書における結論として、各事業の「評価」については、事業全体を通して概ね、基本理念・基本目標及び事業目的の実現に寄与したものと総括する。また、各委員からの意見を「評価」および「課題提起」として分類し、今後の改善を要する事項などを記述した。さらに、「事業全体に対する評価」として、事業全体を通じた総合的な評価や評価方法のあり方について記述した。

報告書取りまとめの経緯については、まず、社会教育委員会議において、プラン進捗管理の基本的視点について確認し、事業担当課が作成した「令和5年度事業別評価結果報告書」の精査が行われた。また、質問シートを使用し事業担当課との間で質疑応答を行った。さらに、同会議において抽出したアートスペース事業（文化芸術課）、藤澤浮世絵館事業（郷土歴史課）、生涯学習人材バンク「湘南ふじさわ学びネット」（生涯学習総務課）、図書館によるボランティア養成・活動支援（総合市民図書館）、マリンスポーツ・ビーチスポーツの推進（スポーツ推進課）などの現場視察を行った。現場視察においては、事業説明の聴取及び質疑応答を行い、令和5年度がプラン2年目であることを踏まえ、次年度以降の各事業の取組の方向性を勘案しつつ、各事業がプランの基本理念・基本目標に沿って進捗しているかどうかについて、慎重に評価を行ったところである。

本報告書の作成にあたり、84事業を個別に分離して評価を行うよりも、プラン全体を横断的に評価し、通底する課題の確認を行うことを重視する意見が多く見られたため、「課題提起」については、基本目標ごと・事業ごとに挙げられた意見のうち、全体に共通する意見を記載する形とした。

令和6年度の進捗管理においては、本報告書の内容を踏まえ、評価方法等の改善について検討しつつ、プラン遂行の3年目としての評価を行っていくこととする。

2 基本目標1「学びたい思い」を支援する

(1) 評価

ホームページやSNSなどのWeb媒体や広報ふじさわなど、多様な媒体を活用した学習情報の発信により、学習相談機能の充実や学びのきっかけとなる機会の提供が図られており、概ね、基本理念・基本目標の実現に寄与したものと評価する。

ア 学びへのアクセスに対応できるように、ホームページやSNSなどの多様な媒体を活用している点は評価できる。さらに、状況に応じた効果的な媒体の活用や、受け手側がよりわかりやすい発信方法を期待する。

イ 学びへのきっかけとしてハードルを下げる努力や、身近で学びの楽しさを知ることができる工夫が行われている。

(2) 課題提起

ア 「歴史文化に藤沢らしさがある」とあるが、歴史文化だけではなく、非常に豊かな自然など、注目点は多くある。「藤沢らしさ」については、より市民にわかりやすいコンセプトについて考えたい。

イ 若年世代や勤労世代など、世代別に目標を設定している事業があってもよいと思う。

ウ 若年世代と高齢世代では、スマホやアプリの発達が進むと、どうしても情報の受け方が変わってしまうため、実態に合わせて情報を提供する必要がある。例えば、Web、SNSに長けている世代に対してはLINEなどのツールを使用し、高齢世代に対しては紙媒体の方が望ましい、などを調査したうえで、より効果的なツールを活用していければよい。

エ プランに「ホームページやSNSなどのWeb媒体を活用した効果的な情報提供に努めます」と書かれている。市のLINE公式アカウント等を通じて情報が提供されているが、情報が多いときと全くないときがある。情報が多いと必要な情報が埋もれてしまうことがある。情報発信の方法を工夫しないと、有益な情報が数多く発信されているにも関わらず、読まれずに終わってしまう懸念がある。

オ 事業の効果測定について、例えば1週間や1ヶ月などの短いスパンで、そのやり方で成果があったかを検証する。紙もWebも情報が大量に存在する中、市が発信する情報を市民の方にとどのように受け取ってもらうかを意識し取り組む必要がある。

カ 市ホームページでは、行政手続き関係などについてはとても見つけやすいが、文化・芸術関係のものを調べようとすると、深い階層まで入っていかないと見つけにくい。発信方法の他、受け手側にとっての探しやすさという視点も必要である。

キ 「市民の方々は、広報ふじさわを大変よく見ている」という話も聞いている。新しいことにチャレンジすることも大切だが、現在行っている事業でどのようなリアクションがあったかを確認し、リアクションがよい事業について伸ばしていく方法もあると思う。広報ふじさわに特

集記事を1ページ入れるなど、紙でしかできない方法もあると思う。「努める」や「次回に生かす」という部分については、具体的にどのようなアクションにより、どこをめざすのかを提示し、できれば数値化されていればよい。

ク Webで全ての情報を収集する場合、見やすさの他、情報が更新されていないと見てもらえないこともあるため、頻繁な更新が必要となる。

ケ 図書館には子どもから高齢世代までさまざまな年代の方が来館する。特に学生の来館は非常に多く、曜日や時間帯によっては席の順番待ちも発生している状況である。図書館における学習支援については、資料の充実や情報提供だけでなく、学習するための機器の充実や、学習するための場の充実を図る施策があってもよいと思う。

3 基本目標2「学べる機会」を提供する

(1) 評価

人生100年時代を見据えた学習機会の拡充が図られていることや、地域資源である海などを活用した事業について「藤沢らしさ」を生かした事業展開がなされており、概ね、基本理念・基本目標の実現に寄与したものと評価する。

ア 図書館においては、ボランティアの方々がとても上手に読み聞かせを行っており、子どもたちがとても楽しんでいる様子が見えた。

イ 藤沢市の地域資源である海を活用したマリンスポーツ・ビーチスポーツなどの事業は、藤沢らしさという点ではとても特筆すべきである。

ウ 藤澤浮世絵館、アートスペースについては、個人でも来館して自身の中で学びを得られるという部分が基本目標2に合致している。

(2) 課題提起

ア 全体的な数字だけの評価ではなく、年代別の参加率などの指標が考えられるとよい。例えば「30代の参加率」では、子どもがいることや親も関係していることなどが想定される。人、市民として生活している上での関係性も含めた視点も必要だと思う。

イ シティプロモーションの新しい指針、市歌がJR藤沢駅の発着メロディとして流れていることなど、周縁の情報も発信してあげると、より注目度が上がると思う。あわせて、各課同士の横のつながりの情報についても期待したい。

ウ 毎年、多くの新規参加者を集めることは、かなり大変だと思う。また、事業に参加したことがある人が、リピーターとしてしっかり根付くことも重要と考える。報告書の実績欄に「数値実績外の実績等を含む」と記載があるので、新規参加者の割合があってもよいと思う。

エ さまざまな施設と連携しながら、子育て中の方が1人にならないような、家にこもらないような取組を期待したい。

オ 多くの参加者を募る事業を実施する際には、地震や津波などの災害対策も並行して行う必要がある。

カ 専門家の技術指導を受けられる環境や、活動に参加できる導線を付帯した方が、より基本目標2に合致する。

キ 今は情報がそれぞれ点で存在しているだけの状態に見える。例えば、事業全体のまとめサイトのようなものを運営し、関連情報が一元的にまとまっている状態を作らないと、情報を探す側としては必要な情報に到達できないと思う。情報発信の集約に取り組むのも一案である。

4 基本目標3「学びあい」を創出する

(1) 評価

多様な主体との連携・協働により学習機会が創出され、「学び」や「学びあい」の場が数多く存在し、学びと活動の好循環による「学びあいの環」が広がっており、概ね、基本理念・基本目標の実現に寄与したものと評価する。

ア 多様な主体との連携・協働を図りながら、さまざまな学習機会が創出されている点は評価できる。さまざまな学習機会において、地域コミュニティが活性化するような仕組みづくりのさらなる促進を期待する。

(2) 課題提起

ア 活動の場があるか、ニーズがあるか、丁寧に突き合わせしていくことが望まれる。活動の場が示されると、必要とされる学習に集中できると考える。そのため、活動の場と学習の場をつなぐルートが作られることを期待する。

イ 各課との連携はもとより、企業や地域社会との連携などがあれば、学びがさらに広がっていくと思う。

ウ 学んだことを地域還元するまでが生涯学習のサイクルであると考えられている。市民が学んだ成果を生かす仕組みをさらに作っていくことが望まれる。

エ 今の時代は「一緒にやりませんか？」と声をかけあうことが少ない。地域の縁側や集いの広場などにおいて、学びのきっかけづくりを考える必要がある。

オ 場づくりを行うとき、「ここはみなさんで学びあいをする場です」という宣言が必要ではないか。「隣の方に話しかけてもよいし、話しかけられても受け入れてください」と伝える必要がある。居場所の開放や場の提供によって自然に交流が生まれるのを待つのではなく、生まれるような働きかけや、学びあいの場であることのアピールが充実するとよい。

5 基本目標4「学んだ成果」を生かしつなげる

(1) 評価

学習成果をボランティア活動や市民活動などにつなぐ仕組みづくりや、学びを生かした「ひとづくり」の支援が進められており、持続可能な地域コミュニティの形成が図られていることから、概ね、基本理念・基本目標の実現に寄与したものと評価する。

ア 図書館では、実際に読み聞かせについての養成を受けたボランティアの方々が、生き生きと活動されており、学んだことを生かせる出口がよくできている事例である。

イ 若者しごと応援塾（ユースワークふじさわ）については、学んできたものを生かせず、社会に馴染めない、という若者たちが相談をして、元気・勇気をつけて次につなげる場所となっており、正に基本目標4に合致している。

ウ 学んだことを発表する場、成果を発揮できる場を提供することはとてもよい取組である。チームにならなくても個人でもできるので、今後も伸ばしていくことを期待する。

(2) 課題提起

ア ボランティアの養成講座は、受講者に知識をインプットする一方で、アウトプットできる場を伝えていないケースがある。活動方法や問い合わせ先などの情報を伝えないと、行動を起こすまでに至らないことが多い。養成講座の最後などに活動できる場所を必ず伝えることで、活動を始める市民が増えてくると思う。

イ 市で応援しているセミナーであれば、市内で活躍できる場所はたくさんあるので、それを紹介する仕掛け、仕組みを作ることが望まれる。各課にまたがっているため、集約することは非常に大変だが、一度実行すれば全部をまとめられると思うので、生涯学習でぜひ検討していただきたい。

ウ ボランティアについて、交通費を出すなど、長く続けられる環境の整備も考えていく必要がある。

エ 防災関係について、「避難施設は避難してきた方々が運営する」ということをさらに周知する必要がある。起震車体験や防災講話などを行う中でそのような話もできると、防災意識が高まっている情勢なので理解が深まると思う。

6 事業全体に対する評価

(1) 評価

「生涯学習ふじさわプラン2026」の令和5年度事業については、全体を通して概ね、基本理念・基本目標及び事業目的の実現に寄与したものと評価する。

ア 自己評価が低い事業の中にも、取り組み方が高く評価できる事業も見受けられた。

イ 84事業と非常に多種多様な事業を展開しており、市の総合指針に沿った取組も非常に強く打ち出されていると感じられ、大変高く評価できる。

(2) 課題提起

ア 報告書の「課題に対する今後の取組」において、「検討」や「考えている」などと記載している事業については、今後の取組がより明確になるように、どのような方向で、どこを検討するかなど、さらに踏み込んだ回答を期待したい。

イ 「藤沢らしさ」とは何か。より市民にわかりやすい「藤沢らしさ」について考えていく必要がある。

ウ 携帯を1人1台持っている時代であるため、「生涯学習」に特化した「生涯学習」の情報だけを発信するLINEグループやメールマガジンなど、興味・関心があるものにリンクすると、次々と関連情報に進んでいけるネットワークや情報収集の仕組みがあるとよい。

エ 広報宣伝・広報周知が全事業に関わるテーマである。生涯学習事業の広報周知に関してのサポーターや市民ボランティアなどを募集してはどうか。

オ テーマが増えれば増えるほど、一つひとつを底上げすることに対し、かけられる労力も減り、得られる効果も減ると思われる。カテゴライズできる事業群を見定めて、一点集中で広報周知の手法を試してはどうか。全体を上げるというよりは、1つのテーマに関して、どの切り口で広報周知するとより多くの市民の関心を得られるか検証していく。成果があった場合には、転用できるようなら転用し、そうでなければまた別の方法を考えてもよい。

カ 定量目標であれば、実績には達成率を記載しその達成率で評価するべきである。定性目標であれば、いつまでに・何を・どのような状態にするのかを明確に示して、その進捗で評価するべきである。

キ 「課題に対する今後の取組」については、目標との連鎖性を意識し、より綿密にそして明確に行われることを期待したい。

ク 報告書に記載されている以上に、数値以外の実績があると思われるので、その部分もつまびらかに記載されているとよい。